

相異があるからであるが、バーヴィヴェーカは、その相異に即して、二段階的な自性理解を展開したと考えられる。

まず、本来的な自性を検討する。バーヴィヴェーカは第一偈に註釈するにあたり、最高の真実として、あるものが特定のあり方で自体的に存在している場合、それには生起はありえないと指摘する。そして、自性とは固有な性質／存在であり、それ自身の本質だと定義する(一五七b三)。続いて第二偈への註釈で、自性の無依存性から「特定の言語表現を持つ他の基体に依存しない」性質を導出する(一五八b三)。これは本来的な自性が言語表現不可能であることを示唆していると考えられる。従来、『知恵の灯火』は、言説においては自性を肯定し、最高の真実においては自性を否定するものと解釈されてきた。しかし、バーヴィヴェーカの理解する最高の真実における自性は、単なる否定対象ではなく、何らかの無規定的で言語表現不可能なものを意味すると理解すべきかも知れない。

次に、言説上の自性を検討する。これには、文脈から「固有の本性」と、他性と対置される「それ自体」という二つの意味内容が考えられる。前者の事例には火の熱さが当てはまる。この熱さは原因と条件によって作られたものだが、他のものの中にないから自性と呼ばれるため、実は慣習上のものと結論付けられている(一五八a六)。この場合、自性は事物の性質なので、固有の本性と解しうる。同様の事例は、第三章にも見られる。第三章では認識器官が特定の対象領域群に働く本質的機能が自性として考えられ、それは言説においてのみ肯定されている(七五b六以下)。他方、後者の事例は第四偈の註釈に登

場する。この文脈では、他性は原因という事物であり、自性は現にある結果である事物自体であるとされている(一五九a五)。従って、この自性は、或る事物を再帰的に呼ぶ「それ自体」だと了解されよう。この他性と対置された自性のあり方に関して、第十四章に重要な指摘がある。それは、相互依存的に「一方」と「他方」が成立するのは言説上であり、両者は特定の言語表現を持つ基体に依存する性質を有するというものである(一五四b一以下)。この指摘に従えば、第十五章第三、四偈の他性との関係で成立する自性は言説上のものになる。従って、それとは反対の本来的な自性は、最高の真実として「ある」とは筆者にはまだ言い切れないが、言説上の自性の規定に適合していないのは確かである。

アティシャの顕教文献において言及される密教文献

望月 海慧

アティシャ(デーパンカラシュリージュニヤーナ)は、『菩提道灯論』を著し、チベットに仏教を伝えた者として知られているが、インドのヴィクラマシーラ僧院の学僧としても知られている。それ故に、彼の著作を調査することにより、同僧院における經典の収蔵状況を推測することができる。今回は、彼の顕教文献における密教文献の引用を調査し、彼が密教文献を一般にどのように扱っていたのかを明らかにする。

『菩提道灯論』では、真言乗のセクションにおいて、『從勝初仏出現タントラ』が言及され、修行者に対する波羅蜜乗と真言乗の明確な区別が述べられる。

同論の自註では、七種供養の解説において『統鬘タントラ』が言及され、七部の波羅提木叉の解説において『真実撰集大タントラ』が引用され、アサンガの『瑜伽師地論』に七部の波羅提木叉の補足として、『文殊師利根本儀軌』が引用される。般若波羅蜜のセクシオンではジュニャーナキールティの『波羅蜜多乗修習次第概説』の引用から『大日経』が孫引きされ、布施波羅蜜の解説で『四座タントラ』と『三界中勝甚意大王瑜伽タントラ』が、波羅蜜乗の最後に『吉祥最勝第一王経』とトリピタカマールラの『三理趣灯』が引用され、中観と真言乗の連続性が示されている。真言乗のセクシオンでは、『三理趣灯』と『智金剛普集大タントラ』が引用され、七種のタントラの分類が行われる。さらに師のアバドゥーティパの言葉、『深密授記大タントラ』、パドマヴァジュラの言葉が引用される。また根本偈の『從勝初仏出現タントラ』への言及では、師の『灌頂説示』が引用され、真言乗の最後と奥書では、『チャクラ・サンヴァラ・タントラ』が言及される。

『中観説示開宝篋論』では、菩提心の解説において、『大日経』と『秘密集会タントラ』が、菩提心の特殊性の解説において、『甚妙慧タントラ』と『吉祥最勝第一王経』が引用される。仏・菩薩の解説では、慈悲の説明で『大日経』とアヴドゥーティパの言葉が引用され、法身の説明で『金剛鬘タントラ』と『智金剛集タントラ』とナーガールジュナ『五次第』と、再びアヴアドゥーティパの言葉が引用される。諸学派とその論師の解説では、タントラの注釈書による論師の区分がまとめられ、ナーガールジュナの著作についても密教関係の著作がまとめられ

れている。ナーガールジュナの授記の解説では、大乘經典と並んで『文殊師利根本儀軌』とチャンドラキールティ『灯作明』とアーリヤデーヴァ『行合集灯』が引用される。テキストの最後は、真言乗の解説があり、アヴアドゥーティパの言葉と『三理趣灯』の引用で結ばれる。

『業分別論』では、『密修習大金剛尖タントラ』と『大日経』が引用されるものの、大乘の典拠として引用されている。

以上の引用文献を整理すると、最も多い引用文献は『大日経』である。これは先行する論師による引用が知られていることによるが、初期密教經典であるために大乘と共通の教義を見ることができるところであろう。その引用の在り方については、彼は真言乗の解説のためだけに密教文献を引用するのではなく、声聞乗や波羅蜜乗の解説においても大乘の經論と並んで引用している。それは、前者を後者で補うだけでなく、基礎的部分における両者の共通性を認めているからであろう。ただし、両者の差異を明確にする際にも、密教文献が引用されている。ナーガールジュナ、アーリヤデーヴァ、チャンドラキールティについては、彼らに帰される密教文献も引用されており、中観の延長線上に密教をとらえていたことがわかる。自らの師であるアヴアドゥーティパの引用については、典拠の明示がなく、直接に聞いた話の内容が述べられているようである。